

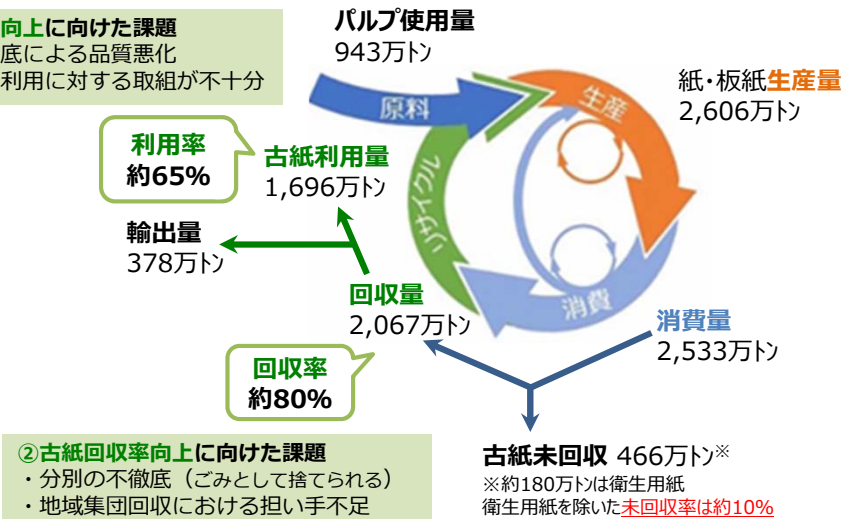
1 古紙の循環状況と課題 (数字は全国, 2018年)

※(公財)古紙再生促進センターHP参照

- 紙は、基本的にリサイクルを前提とした製品となっており、すでに資源循環のシステムが構築されていると考えられる。
- 回収率約80%だが回収された古紙の品質や技術的要件、輸出市況により国内での利用率は約65%となっている。
- 回収及び利用をさらに促進するためには、下記の課題解決に向けた取り組みが必要。

- ③古紙利用率向上に向けた課題
- ・分別の不徹底による品質悪化
 - ・古紙の優先利用に対する取組が不十分

- ①新たな資源の投入抑制に向けた課題
- ・ペーパーレス化の促進
 - ・古紙利用率向上 (古紙の優先利用)



- ②古紙回収率向上に向けた課題
- ・分別の不徹底 (ごみとして捨てられる)
 - ・地域集団回収における担い手不足

2 本市の古紙の現状

表1 可燃ごみに含まれる再生可能な古紙量の推移 (万トン)

	2009	2018	2018-2009
家庭ごみ	4.6	4.4	-0.2
(内、雑がみ)		3.9	
事業系ごみ	10.6	6.6	-4.0
(内、雑がみ)		5.4	

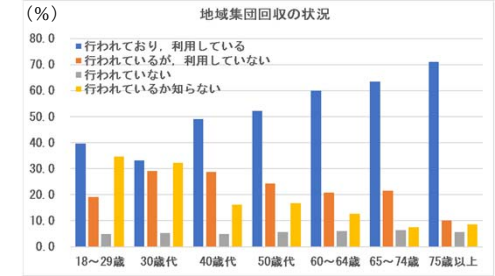


図1 地域集団回収の状況

図2 雑がみの排出方法(2019年調査)

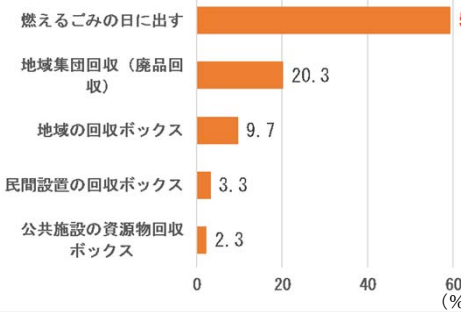
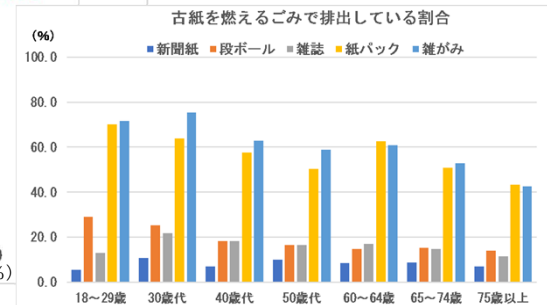


図3 世代別古紙の排出方法(2019年調査) (燃えるごみで排出している割合)



古紙の現状と課題

- ・可燃ごみ中の雑がみ：家庭約3.9万トン、事業系約5.4万トン
- ・地域集団回収：年齢が上がるほど利用率が高い。若者世代の認知度が低い (図1)
- ・雑がみ：約6割が燃えるごみで排出 (図2)：年齢が上がるほど古紙をごみとして排出する割合は低下 (図3)
- ・段ボール：20代、30代がごみとして排出する割合が高い (図3)

主な課題

- ・地域集団回収の担い手不足への対応
- ・「雑がみ」回収の認知度向上による資源化の促進
- ・特に若者世代は、段ボールも含め資源化可能な古紙の排出についての意識向上が必要

3 新計画での施策の方向性

将来のあるべき姿

- ① 新たな資源の投入が抑制されている
- ② 古紙回収率が向上している
 - ・可燃ごみへの古紙の混入が減少している
 - ・古紙の回収への取組み参加者が増加する
- ③ 古紙の利用率が向上している
 - ・事業者から排出される古紙の資源化が進む

福岡市施策の方向性

- ・発生抑制 (ペーパーレス化) の促進
- ・古紙の優先利用の促進
- ・雑がみ等の資源化に対する認知度向上
- ・世代別の施策 (広報啓発, インセンティブ制度)
- ・地域の担い手不足への対応
- ・事業者古紙の資源化徹底 (分別区分追加)

指標の考え方(案)

- ・紙使用量(市役所)
- ・民間事業者におけるグリーン購入の普及状況
- ・可燃ごみ中の再生可能な古紙量 (組成調査)
- ・地域集団回収の実施団体数, 回収拠点数
- ・可燃ごみへの混入率が減少 (組成調査)